

制の学生が同時に卒業するというかつてない就職難の年で、父を亡くした引揚者とあつては、どこかの企業からも採用の声はかからなかった。人見校長が親身になつて心配して下さい、総合商社の経営に参加しているかつての教え子に頼み込んでくれたお陰で、やつと就職することができた。

会社に提出した履歴書の文字が気に入つたのか、私の配属先は秘書課であつた。転勤した先々でも毛筆書の仕事がついて回るようになってきたので、小川竹城師に就いて正式に書道を習うことになった。小川先生もまた素晴らしい方で、お陰で商社を定年退職してからも、カルチャー教室の書道講師として地域社会のお役に立っている。

今は子供二男一女、それぞれに所帯を持ち孫七人の祖父として感謝の毎日を送っている。

父のあまりにも早い他界については今も悔いが残るが、母が八十の坂を越えるまで生きながらえてくれたのがせめてもの慰めであつた。さらに長兄は卒寿を、次兄は傘寿を、姉は喜寿を、私は古

希を迎えなお健在でいられることは何とも有り難いことである。徴兵適齢期の男子三人が、一人も戦争の犠牲にならなかつたのは、奇跡に近いことであつた。

思えば、今までに何度死線を乗り越えてきたことか。危険に遭う度にいろいろな方のお陰で今日の自分があると思う。余生は残り少ない。当時お世話になつた方々への恩返しはもはや叶わぬが、代わりに、ささやかでも郷里の方たちのお役に立つことで償いたいと思う昨今である。

難民流浪の三〇〇日

兵庫県 戸城 輝 一

一 混乱の幕開き

今、突然に第三者から、「今住んでいる所を、今日の何時までに空けて、この街から出て行け。それに従わなければ命の保証はしないぞ！」と言

われたら、あなたは果たしてどうするか？ だが、私は実際にそのようなことを、身をもって体験した。

その日は、日本があの大戦に敗れてから二週間経った、昭和二十（一九四五）年八月二十九日のことだった。私の住んでいた満州国奉天省の営口市では、前日までの雨が上がり朝からときどき薄日もさす曇り空で、蒸し暑く何となく嫌な感じの日だった。

朝、ラジオ放送や町内会の連絡などで、本日重大な指示があるからという予告があった。十時ごろになって、ラジオから「日本人住民に告ぐ！」と言って、「日本人は全員、午後四時までに営口市を退去せよ。もしそれに従わなければ、生命の保証はできない。これはソ連軍司令部の命令です」と、切羽詰まった声のアナウンスが繰り返し繰り返し流れてきた。私の家は社宅だったから、連絡網によって会社からも同様のことが慌ただしく知らされてきた。「えっ！ まさか！」と、み

んな一様に驚きの声をあげたが、次いで「さあ！ これからどうする？」という思いが走った。

それまでの歴史の中において、海外で居住していた日本人が難民になるという事実は無かったし、「難民」という言葉さえ知らなかった。しかしこの日を境にして、自分自身がそれを体験することになるなどとは思ってもみなかった。それから、悲惨極まりなき難民生活が始まることになった。

二 私の子立ち

私は、支那事変（日中戦争）ぼつ発後間もない、昭和十二年の冬、兵庫県明石市から父親の転職に従って一家を挙げて渡満し、営口市に住むこととなった。当時の我が家は、両親と小学校二年生の私の三人家族であった。

そのころの日本は、海外雄飛の風潮がみなぎっていたが、特に建國日も浅い新天地、満州国で、産業振興のためにひと肌脱ぎたいという希望をを持った人々が多かった。父も、ご縁のあった方か

らの誘いによって、営口紡績株式会社で働くことになり、社宅に落ち着いたのだった。今でいう「スカウト」されたのだった。

そして数年は、平穩にして豊かな日常生活を過ごして、小学校を卒業した。中学校への進学に際しては、父の知人の勧めもあつて、関東州の旅順市にあつた旅順中学校に行くことになつた。

親元を離れて初めての寄宿舎生活だったが、大東亜戦争の激しい戦局の最中とて、食糧事業も極めて悪くなつていて、毎日の食事は大豆を小割りにして混ぜたご飯で、お菜も粗末なものであつた。食べ盛り、育ち盛りの年ごろなので、足りるはずも無かつたが、それでもいろいろと鍛えられて、体はぐんぐんと大きくなり、たくましくなつていった。三年、四年と順調に進学していったが、昭和十九年になると、学徒動員令によつて学校での勉強はほとんど無くなり、学生は勤労働員ということ、満州国内や関東州内の鉄鋼関係、化学関係の工場や対空監視に、あるいは飛行場の

建設などに駆り出されていった。粗食に耐えての肉体労働の日々だったが、「勝つまでは！」の合言葉をよりどころとして、元氣いっぱい度過ごしていた。

勤労働員に明け暮れていたときに、関東州全域の大学、高専、中学校から選抜されて、滑空訓練に参加することになり、大連の少し北に位置する金州で訓練が始まつた。どうせ近い将来には軍隊に入るのだから、本物の飛行士の速成に少しでも役立つようにとの趣旨で、学生を選抜したのでつた。自動車の後輪に「ドラム」を取り付けて、ワイヤーロープで巻き取ることでグライダーを飛ばす、「中級」の滑空訓練で毎日しごかれていた。

八月九日、ソ連軍の不法侵入の情報により、十三日には関東州全域にも戒厳令が布告され、私たち滑空訓練生隊は解散させられて、それぞれの学校に戻ることとなつた。あちらこちらに散らばつて、それぞれの動員先で働いていた級友も、全員学校に戻つて来て、あの八月十五日を迎えた。

重大放送があるとのこと、校庭に集合して東京からの放送を聞いた。雑音がひどくて何が放送されているのかさっぱり分からなかったが、放送が終わってから、校長から戦争が終わったことを告げられた。みんなは茫然自失、声もなく立ちつくしていたことを思い出す。

この後寄宿舎に戻り、舎監先生から、取りあえず親元に帰省するように指示があった。私は、小さなトランク一つを提げて旅順を後にした。満州大陸南端の旅順から大連を経て北上する列車は、幾度か途中の駅で止められた。反対側を見ると、南下する列車が止まっていて人が溢れ、駅構内の棚には洗濯物がいっぱい干してあった。私はこの様子を見ている、うかつにもまだ事の重大さに気が付いていなかった。北満地区から避難して来た人たちであることも、またやがては自分も同じ目に遭うことになろうとは、全然考えもつかなかった。

三 追い出されて、大石橋に

このような経緯を経て、昭和二十年八月二十九日を迎えたのである。

「日本人は、全員午後四時までに営口市を退去せよ」の通告は、ラジオでも繰り返し放送されていた。社宅の家々にも、会社から「急いで出発の支度をするように」と伝えられた。出発の準備をしようと思っても、突然の予期していない事態に遭遇して、何をどうしてよいのかまったく戸惑うばかりで、気ばかり焦って体は全然動かなかった。

こんなときにだれでもすぐ思いつくことは、食べる物である。後日になって思い知ったが、重い米を持つことはいかに大きな負担であったか、これは経験した者にしか分からないであろう。

慌ただしく過ごしていた昼前に、父が五月に召集されるまで会社で目にかけていた、部下の中国人、王永生さんが訪ねて来て、たどたどしい日本語で「ここから出て行かないで、自分の家に来て

はどうか？」と言ってくれた。母にも、「奥さん、大丈夫だよ。わたし皆を守るよ」と熱心に話していた。しかし、母はその申し出に感謝しながら、「皆さんと一緒に退去するのだから、それはできない」と言つて丁重に断つたところ、今度は五歳になつていた弟の宏二を指さして、「こども預かるよ、安心よ」とも言つてくれるが、こちらは毛頭その申し出を受ける気持ちは無かつたので断ると、残念そうな態度で、「元気でね」と言つて帰つて行つた。このときに、もしも母や私が病気にでもなつていて寝ているような状況であつたら、王さんの好意を受け入れていたかもしれない。そうなれば弟は、「日本人残留孤児」の一人となつていたかもしれないと、後になつてふと思つたことがある。

ソ連軍が営口市に進駐してきたのは、多分八月二十日ごろだつたと思う。司令部からの命令と伝えられた「日本人全員退去せよ」の真相は、当時の私には知る由もないが、私が旅順から帰つたの

は、確か八月十六日だつたから、退去命令の出るまでの十日ぐらいの間に、在留日本人だけに大量の食糧、衣料の放出配給があつた。米、みそ、しょう油、油、綿布、タオル、靴下などで、このことが中国人などに大きな反感を持たれて、この日のことにつながつていったのではないだろうか。さらに、営口市には良港があつたので、軍事的な意味合いもあつたかもしれない。

私たちが住んでいた紡績会社の社宅は、新市街、すなわち日本人街の外れにあつて、私の家は一番端で、すぐ横手は小さな土手になつていて、街との区切りになつていた。その向こうは高粱畑が見渡す限り続いていて、小山一つない大平地で、社宅周辺は普段は人の行き来もまばらな、静かな所だつた。

しかしその静けさも、この数日ばかりは、ソ連兵の放つ銃声や中国人が何やら大声で叫びながら走り回るなどの、騒然とした状態となつていた。

このような中で、母と身に着ける物、持つて行

く物を選んでいたが、できるだけ身軽にと思いがらも、ついあれもこれもとなっていた。本当は、金目になる軽くて小さい物、例えば指輪や時計や装飾品などを持ってよいのに、着物と配給された軍足に詰め込んだ米を三、四本持つことにした。軍足に詰め込んだ米は、一本に二、三キログラム入ったから、これだけでも一五キログラムぐらいになっていた。家族の多いところでは、もつと大変だったろう。夏だったから、衣類は簡単な着替えだけでいいと思ったが、もしも夜になって冷え込んだらと思ひ直し、厚手の物三人分を持た。さらに雨合羽もいるなど、だんだんと荷物が増えた。厄介なのは、かさばる炊飯道具だが、幸いに飯盒があったので助かった。だがそうなる、今度は調味料もいる、みそも、塩も、砂糖もいるといつて、ますます増えて重くなってしまう。それに飲み水は絶対に必要だ。しまいにはわけが分からなくなり、手当たり次第に要りそうな物を、母と私のリュックサックに詰め込んで出発

した。

どこの家でも、再び戻ることのできない家なのに、戸締まりを厳重にしていた。どこにどのようにして行くのか、そこには何が待っているのか、これから先のことにはだれにも分からない。みんなが行くから自分たちも行く、ただそれだけだった。営口紡績会社の社員の方といっても、若い人はほとんど召集されていたので男手は少なく、二十人ぐらいだったが、この人たちが女、子供百人ほどを守りながらの避難行となる。私の家族は母と弟だけだから弟を挟んで歩いたが、多人数の家族のところは大変だった。

取りあえずの目的地は、営口市から約三〇キロメートルぐらい離れたところの、満鉄本線の大石橋とした。大石橋までは、まだ汽車も通っていたらしいが、厳しい規制があつて我々は乗れなかった。なにしろ、いくら日本人が少なかった営口市とはいえ、約五、六千人の日本人が住んでいたのではないだろうか。それが一度に脱出するのだから

ら、普通の人では汽車などに乗れる余地などは無かった。營口は、遼河が渤海湾に注ぐ河口に位置していたから、南へ下がっても広い塩田があるだけの所なので、北の方向の大石橋に向かうほかは、進むべき道は無かった。

歩き始めたが、前日からの降雨で道はぬかるんでいて、歩き難いことおびただしく、道幅はあつても片側は雨の後なので、かなり深いクリークとなっていた。それに加えて幹線道路のため、ソ連軍の戦車が地響きをたて泥を跳ねあげて通るので、我々は一列縦隊になって歩かざるを得なかった。延々と日本人避難民の列が続いていた。平たんな土地といつても多少の起伏はあるから、少し伸び上がって前の方を見れば、相当遠くまで見渡せたが、前も後ろもぞろぞろと歩く日本人ばかりだった。

五キロメートルも進まないうちに、せつかく持って来た荷物を、足もとに捨てる人が出てきた。恐らく米などの食糧であろう。それを、ク

リークの向こう側で見ている中国人が、胸まで水に漬かりながら渡つて来て、奪い合いながら持つて行った。空は曇りがちで、やけに蒸し暑い。私のように元気な若者でも苦しくなつてきて、背負っている荷物が肩に食い込んで痛くなつてきたが、齒を食いしばつて我慢して歩いた。

そのうちに、泥の道にへたり込む人たちが続出してきたので、余計に歩きづらくなつてきた。止まつては歩き、歩いてはまた止まる。近所に住んでいた隣組のグループ、私たちのように社宅家族の一団、あるいは身内だけの集団など、それぞれの組が申し合わせたように長いタオルなどを結んで、離ればなれにならないようにして歩いていった。恐怖と不安、それまでの暮らしの中で日本人にとつて想像もしていなかった試練に直面している現実の中で、大石橋へ大石橋へと向かつて、ただひたすらに歩くだけだった。

精神的、肉体的に極めて過酷な状況の中では、自分自身だけでも精いっぱい行動だったが、男

の人たちは自分の身内だけでなく、他の人たちに對しても、荷物を肩替りして持つてやったり、幼い子を肩車や背負ったりして、助け合いながら歩いた。まだまだ相当な距離があるのに、「もうすぐだ！ 頑張つて！」とか、「もう、大石橋は近いぞ！」とか、「頑張れ！ 頑張れ！」などと大声を出しながら歩いたが、そのことが随分とみんなの氣力を奮い起こしたのは間違いない。

夜もかなり更けたところに、ようやく目的地の大石橋にたどり着き、駅周辺にへたり込んだ。しばらくは、声も立てずにひたすら眠り込んだ。

最初の目的地、大石橋に一応着いたものの、さてこれからどうするのか、一同の最大関心事であった。

四 鮮満国境に向かつて

南に行くのか、それともさらに北上するのか、という二案の不確実な情報が飛び交う中、私たちの一団でも意見が分かれてしまった。結局は、それぞれの考えに従つて行動することになり、少数

の人々は南の方向に行き、私たち大多数の人々は、姉妹会社を頼つて北の奉天（瀋陽）に向かうことになった。不定期ではあったが、まだこのときには満鉄の列車は動いていた。

今になると日時が定かでないが、北上する列車が出るというので、駅に行った。北からの避難民で南行きの列車は超満員で、駅周辺には避難民が溢れていた。その中で幸いに北上する列車に乗った。奉天の手前に、蘇家屯という安奉線との分岐駅があったが、ここまで来て列車は止まってしまった。情報によれば、奉天市内では暴動が発生していて危険とのことだった。「それならば、少しでも日本に近い方に行けるだけ行こう」ということになり、たまたま向かい側に停車していた朝鮮方面行きの安奉線の列車に乗り換えた。列車は相変わらず動いたり止まったりしながら、ともかく鮮満国境の安東に着いたが、その先の鴨緑江は渡れないとのこと、この安東駅で下車となった。この数日の間、食事、洗濯、寝る所、排便な

どはどのようなにしていたのか、あまりの環境激変と精神混乱とによるのか、記憶喪失になつていてよく思い出せない。

五 仮宿、安東での生活

(一) ひと息ついて

安東の街には、既にソ連軍が進駐していたが、銃声も聞かれずごく平穏な感じであつた。ここには東洋紡績の工場があつて、同業のよしみで、社宅の一部と小会館にお世話になることとなつた。本当に有り難く、「地獄で仏」とはこのことだろうと感謝したものだつた。

この東洋紡績のあつた所は、安東市の外れで、鴨緑江の下流域で甲山の麓に位置し、周辺は小住宅団地でもあり、また広大な広場でもあつた。その広場には工場への引き込み線があつて、そこには日本内地から疎開してきたと思われる膨大な量の紡績機などが、梱包されたままに野積みされていた。ソ連軍は、連日武装解除した日本兵を使って貨物列車に積み込み、どこかに運んでいた。

ある日、野積み品が無くなると同時に、ソ連兵も日本兵も安東から姿を見せなくなつた。そのうちに、ソ連軍と入れ替わつて共産八路軍が入つて来た。階級章は一切付けていない軍隊だが、軍規は厳正で、市内の治安はよくなりほつとした。

安東日本人会をはじめとして、いろいろな団体から我々避難民に対しての救済の手が差しのべられていたことを、後日になつて知つたが、日々の食べることのためと、迫つてきた冬に備えるために、まず働かなければならず、働き口を求めて走り回つた。

日雇い労働が主で、継続する働き口などはなかなか無かつた。日雇いの口も無くなると、饅頭や駄菓子類を仕入れて来ては、日本人街、中華街を問わずに売り歩いた。

そんな生活をしているうちに、世話になつていた東洋紡績の社宅を空けなくてはならないことになり、近くの房産住宅に移つた。どういうことは知らないが、その住宅は空家がたくさんあつ

た。六畳二間ぐらゐの間取りの家で、だいたいそこに二、三家族が入って寝起きした。食事は共同炊事で、一軒の家が炊事場になっていて、準備ができれば容器を持ってそれぞれの家から取りに行った。

主食は、玉蜀黍トウモロコシのお粥がほとんどで、たまには高粱コウリョウのお粥もすすっていた。お菜は随分工夫を凝らしていたようで、野菜を油で調理したものも多くて、私のような若者には大変有り難かった。

この炊事をずっと担当していたのは、ソ連軍の目をかすめて脱走して来た、日本軍の下士官だった大友、河田の兩人であった。私たちの一団に合流して避難生活を共にしていたが、一人前の大人として対等に接して頂いたことで、忘れられない二人である。特に用事も無いのに、二人のところに行っていた。その理由の一つは、煙草を覚え、そこで吸うことができたからである。また、色気話に興味を持つ年ごろであったので、いろいろと話を聞かせてもらい、時間の経つのも忘れるほど

だった。

(二) 悲惨なり、奇しき縁！

中共八路軍が進駐してきて間もなく、市内では戦犯狩りが始まった。反動分子という汚名を着せられて、日本人、中国人を問わず、昨日は何人、今日は何人と鴨緑江岸の河原で処刑されていることを知った。

ある日のこと、房産住宅の前の道路を「打車グアイチ」と呼ぶ大八車に乗せられ、罪状を書いた札を体の前後に下げた日本人を見たが、その人はまっすぐの前に見つめて、毅然とした態度であった。その姿は、いまだに瞼に焼き付いていて、忘れることのできない強烈な思い出である。その日本人は省の高官であったので、罪を一身に背負い、従容として鴨緑江岸で銃殺された。

後日談だが、私の第二の人生の仕事において、大変にお世話になっている方がおられ、たまたまこの方が自叙伝を書く際に、私も少々お手伝いをした。いろいろと話を伺っているうちに、この方

の名前が珍しいのでその由来を尋ねた。すると、安東で私が目撃した、あの凜乎とした姿で市中引き回しをされたうえ、惜しくも江岸に命を落とされた方は、叔父さんであることが分かった。

その方の名前は、「札谷惣七郎」という方で、奈良県吉野郡天川村の出身だった。大志を立て苦学行の末、戦後、戦犯を問われてフィリピンで刑死した山下奉文大将に見込まれ山下家の書生となり、勤勉に働きながら大学を出て、官吏として満州に赴任した。奇しくも、私たちが追い出された宮口市の日本領事館に、領事として着任されたのだった。戦争が熾烈を極めてきたころは、安東省の省次長として安東に赴任され、終戦後に責任をとられて刑死されたのであった。

この惣七郎氏が大学卒業のときに、学長から「千古照餘光」と書かれた提灯を頂いたとのことであった。この五文字の感銘が忘れられずに、結婚したばかりの兄に向かって、「兄さん！ 兄さんに男の子ができたなら、ぜひ餘光と名付けて欲しい

い。僕の生きた証としてこの世に残したい」と頼み込んだそうだ。私が親交を頂いている方が、この札谷餘光さんである。

惣七郎氏の部下だった人が、命懸けで日本に持ち帰った惣七郎氏の遺詠も、手許に持つておられる。獄中で詠まれた和歌は、目立たぬように紙縫こよりにして部下に渡されたらしい。

戦後、吉野の故郷でこの紙縫を開いて書き直したのを見せて頂いたが、長い歳月を経て紙も色が変わり、破れたところや、判じ難い箇所もあった。餘光さんが三十二首全部を書き直して、表装し額に収めた。

私の住んでいた宮口市に何年か生活しておられたということ、安東市で偶然に最後の姿に接したということなど、奇しき縁とか不思議な巡り合わせというか、何か因縁を感じざるを得ない。どれを詠んでも、国を思い家族を思う心情が溢れていて、感無量なものがある。

○今日よりは 荆抜きて 我ゆかん

日の本民の 魁として

○罪知らぬ罪にしあれど 獄舎にも

初日は洩れて 心澄みけり

○唐国の獄舎の夜半は 寒けれど

大和心は 燃えたぎりけり

○益良夫の熱き涙は 国思う

赤き心の 真心と知れ

(三) 痛恨なり、子を残して

昭和二十一年冬、二月のある日、「今晚はやけに寒いなあ！」と言いながら、みんなで肩を寄せ合つて眠りについた。どれくらい経つたか分からないが、突然に「バーン！」という大きく激しい音に驚いて飛び起きた。「何事か？」と思う間もなく外でだれかが大声を出して、何か叫んでいる。慌てて服を着て飛び出した。

私たちの住んでいた房産住宅は、緩やかな丘の斜面に建ち並ぶ五軒ずつの長屋であつたが、その一段下の向かい側の家で何か起こつたらしい。急

いで駆けつけて家の中に入ると、何と建具や襖がめちやめちやに壊れていて、その奥に女の人が倒れていて、男の人が抱き起こしているところだつた。周囲は鮮血が飛び散つていて、凄まじい状態だつた。次々に人が集まつて来て、「いつたいたうしたんだ！」と問い掛けたのに対して、その男の人は「八路軍の兵隊が押し入つて来て、銃を構え女を出せと凄んで言うので、駄目だ、駄目だと強く拒絶したら、手榴弾を投げられたのだ」と、取り乱しながら事態を説明した。その嫌がらせに投げた手榴弾が、建具を壊し襖を破いて、奥の部屋に隠れていた女性のところで爆発したのだった。かわいそうに、破片によつてどこかやられたようで、苦しそうに唸っている。これは大変なことになつた。すぐに病院に運ばなければと、隣の家から戸板を外して来て、担架代わりにして河田、大友、私、もう一人の四人で担ぎ、一里ぐらい離れている市の中心部の病院を目指した。

星明かりはあるがほとんど真つ暗だつた。極端

に下がった気温のため前日まで降っていた雨の水たまりが凍っている道を、気が焦りながら必死になつて行つたが、滑つてなかなか思うように進めなかった。

そのうちに、担いでいる方の手がやけに冷たくなり、濡れてきた感じになつた。病院に着いてから知つたが、それは戸板を伝わって流れてきた血であつた。「もうすぐだよ。頑張れよ！」と声をかけて励ましながら担いだ。ようやく病院に運び込んだ。この病院は中共軍の管理下にあつたので、早速手術にかかつてくれたが、待つてゐる我々は気が気ではなかつた。一時間ぐらい手術をしたが、残念ながら息を引きとつてしまつた。肝臓に受けた傷が致命傷となつたようだ。何と悲しいことであろうか。本人もさぞ無念だつたに違いない。

この人は、伊藤さんという人で、ご主人は私の父と同様で召集されていていなかった。一歳半になる、かわいい女の子と二人で避難生活をしてい

た。残された遺児は、伊藤さんの上司の村野さん夫婦が引き取り世話をした。内地まで一緒に引き揚げて歸られたが、その後の消息は分かつていない。

この事件を起こしたのは、正規の八路軍の兵隊ではなく、この地に進駐して来る途中で兵隊になつた者のようで、嚴重な処罰を受けたことが知らされた。「女を出せ！」という行為は、ソ連兵だけではなかつたのだ。

四 八路軍での使役

これから先どうなるのか分からないなかでの冬もなんとか越し、春が過ぎ野山も新緑に覆われた五月の半ばごろだつたか、日本人会から、八路軍の使役に我々の一団からもだれか一人出すように、との要請があつた。だれが行くかみんなで相談した結果、私に白羽の矢が立った。何をするかは秘密であつたようで、詳しくは知らされなかつたが、ともかく一番若くて元気な私は、みんなのためならばと思ひ引き受けた。

集場所は安東駅前前の広場で、百人ほどの人が集まっていた。日本人会らしい人がいて、集まった者を三グループに分けた。私は第一のグループに入れられたが、周りの人はだれも知った顔はなく、不安感でいっぱいであった。

すぐに列車に乗せられ安東駅を出発したが、どこに行くのかまだ知らされなかった。南は北朝鮮で鴨緑江は渡れないから、当然、安奉線で營口方面に向かう他なかった。

しばらく経って、その先は線路が取り外されている山合いの小駅で降ろされ、今度は小一時間ほど歩かされた。着いたところは中国人農家の小部落で、その空家三軒に分宿させられた。私たちを迎えてくれたのは、安東で見慣れていた草色の軍服の八路军ではなく、真つ黒な軍服を着た日本人の兵士たちであった。もちろんすべて日本語で、てきばきと私たちに指示を与えていた。

この場所は、両側からの山が迫る狭あいな谷間の平地で、幅は約二百メートルほどだった。片側

の山裾には、幅約二十メートルほどの、きれいな水の流れる川があつて、緑豊かな場所で、平和なときならばキャンプ地などの憩いの場所として、もってこいの所であった。

日本人兵士の説明では、国民党軍との戦闘が始まつていて、この近くがその最前線であると言つていた。山一つ越えた向こう側は、国民党軍の陣地とのことであつた。使役者の作業は、山の上に陣地を構築するために鉄道の枕木を運び上げる作業で、一日一人一本のノルマが課せられた。

満州国内の鉄道はすべて広軌であつたから、枕木もすぐ大きくて、とてもではないが一人では担ぎ上げることは無理だった。結局、作業は二人一組となつて担ぐことになった。山頂への道は狭く曲がりくねつていて、私のような若者でも、一日二回の往復作業は本當にきつくつらい作業であつた。ただ、黒服の日本人八路兵も我々と同じような作業を黙々と行つていて、我々の力の足りないところを助け補つてくれたのには感心した。

夜になると、一緒の場所で過ごしているいろいろな話を交わしたが、決して自分の出身地だけは明かさなかつた。

五日ぐらい経って、どうしたわけか枕木運搬をしなくてよいという指示が出て、ほっとひと息つくことができた。ここでの食事は自炊で、主食は玉蜀黍だが毎日豚肉が出て、野菜も豊富で結構な食事であり、安東にいる母や弟に食べさせてやりたいなと思つたものである。

この部落の人たちとも仲良くなり、ときには縫い針をもらつて釣り針をこしらえ、山裾を流れる清流で釣りをした。

ある日、真つ白な三〇センチメートルはある大きな魚が何匹も釣れた。魚に飢えていた私たちは、大喜びで早速焼いて食べたところ、とたんに吐き出してしまった。泥を食べているのと同じような味で、きれいな身なのに食べられたものではなかつた。釣りもそれつきりで止めてしまった。

ここにどれくらいいたのか、はつきりとは覚え

ていないが、国共内戦は休戦状態になつていたようだった。

ある日、ぼけつとしていた我々のすぐそばを、それぞれに荷物を持つたり背負つたりした、日本人の一団が通つた。ただごとではないと思ひ近寄つて尋ねると、「日本に帰れるようになった。奉天まで歩いていくのだ！」と言う。この人たちは安東市周辺から歩いて来た人たちだった。それを聞いてびっくり仰天した。安東にいるはずの母たちはどうしているだろうか、こうしてはおれない、どうしても安東に帰らなければと決心して、枕木運びの相棒とここを抜け出すことを決心し、実行に移した。途中でも別に追手が来る様子もなく、安東から日本人集団を運んで来た戻りの列車に飛び乗つて、無事に安東に着いた。

母たちはまだ安東にいて、私が無事に戻つて来たことに、涙を流して喜んだ。

六 野越え山越え、炎天下の脱出行

母の話では、三日後に営口紡績の避難民一行

も、奉天に向かって出発する予定になっていたことだった。母は、私が不在だったので弟と二人でここに残るつもりでいたため、作成された出発申請の名簿には入っていない。一緒に行けるようになったので、慌てて追加申請をしたが「もう締め切ってしまったから」とのこと、取り合ってくれなかった。なんとかしなければと、母が肌身離さず持っていた、父の形見である金の懐中時計を申請書に添えて頼んだら、ようやく許可が出てみんなと一緒にけるようになった。この時期には、時計、万年筆などは超貴重品扱いだったので、金時計の威力は絶大だった。

さあ出発だ。私が使役に連れて行かれた地点よりもはるかに手前までしか列車は運行していなかった。歩くより他はなかった。荷物は一リュックサックと、安東で手に入れたわずかな着替えと、食事には欠かせない後生大事な飯盒、それに畳表のごさ一枚であったが、このごさが途中で役に立ち忘れられない物となった。

安東出発は昭和二十一年七月二日だったと思う。奉天に着いたのが八月五日ごろだったで、逆算してみても三十数日の苦難の脱出行だったが、記憶も薄れた現在、忘れられないことのみを断片的に書き並べる。

七月某日

八路軍に使役に行つて泊まっていた部落を横目に見て、感慨ひとしおで通つた。もうだれもいなくなつていて、仲良くしていた老爺に当時のお礼を言つたら、笑顔で「再見、再見」と、私たちを見送つてくれた。

七月某日

行く手に、川幅のかなり広い川に出くわしたが、橋はなく回り道も見当たらず、致し方なく全員服を着たまま浅瀬を探して渡つた。深い所では腰以上も水かさがあったが、濡れても歩いていけるうちに乾いてしまった。

七月某日

この時期にはあまり雨降りはないのに、突然に

雨が降り出した。みんな急いで木の下などに駆け込んだが、持参していたござを頭にかざして傘代わりにして、親子で雨をしのいだ。夜は、これを道端に敷いてごろ寝をして夜露を防ぎ、そして女性の用足しときには、囲ったものだった。

七月某日

中国人の部落を通るときには、物々交換で食糧を手に入れるのだが、何しろ大勢のことだし、先発組の日本人との接触もあつて、相手も賢くなつていた。だんだんと交渉も難しくなり、思うように必要な食べ物を得ることが難しくなつてきて、そのうちに蛙まで食べるようになった。殿様蛙のちよつと大きいものでも足だけにしか肉はなく、しかも鉛筆の太さぐらいで、すすするようにして口にするのだが、腹は空いていても、泥臭みが強くうまいものではなかった。

七月某日

国共内戦の最中、双方の非武装地帯を通過した。まだ日の高いとき、見慣れた八路軍の服装で

ない兵隊が数人近づいてきて、「もう安心して下さい。この先には我々がいるから!」と言っていた。特に物をねだる様子もないので、「やれ、やれ、やつと国府軍占領の地域に入ったのか!」と思ひ込んで安心してしまった。

ところが、日が暮れてさあこれから野宿だというときに、突如銃声が響き、大きな叫び声も聞こえてきた。斜め後方から、弾が頭上を不気味な音を立てながら飛んで来た。地面に這いつくばり、身を伏せながら様子を見ると、夜目にも多数の人影が手に手に武器らしい物を持って、こちらに向かって来た。

「ここでいよいよ、駄目か?」と覚悟を決めて、母に「やつらが来たら、かなわぬまでも僕は抵抗しているから、その間に弟を抱えて横の高梁畑に飛び込んで!」と言って腹をくくっていた。銃声は止んでいたが、団の幹部の方から「荷物はその場に置いて、そのまま前に向かって走れ!」との指示があつた。全員、ござだけ持って、お互い

に助け合いながら走って行った。彼らは追っては来なかった。ほどなくして、周囲は元の静けになった。

考えてみれば、昼間の兵隊は偽物で我々の様子を探るため近づいてきて、夜になって襲うつもりだったのだろう。怪我人が出なくて幸いであったが、みんな体一つの本当の裸になってしまった。

七月某日

いよいよ難関の山越えだ。「摩天嶺」という山だが、これまではあまり高い山を越えることなく歩いて来たが、この山は大変な難物だった。ある家族では、足の不自由なお婆さんが難渋しながらもここまで何とか一緒に来たが、この山越えを前にして、「私はもう駄目だから、ここに置いて行っておくれ」と言い出し、家族も「私たちも残る」と言った。そんなことはできるわけがない。「營口を出てから安東での難民生活を通じて、一つ釜の飯を食べてお互いに励まし合ってきた仲間だ。生き死にはみんな一緒だ」と、黙っていても

だれもが思っていた。

私と、河田、大友の元兵士の三人が、交替でお婆さんを背負って登ることにした。体の大きな人で、私が当時一六五センチメートルぐらいだったが、それよりも大きいほどで体重もかなりあった。私の番が済んでやれやれと思う間もなく、今度は弟を運んだが、これは肩車だった。荷物は先に取られて何もないから、弟だけなら大したことはなかった。それでもあえぎあえぎ、休み休み登って行ったが、喉はからからで、頂上に着くとその場にへたり込んでしまった。そのときだけからの差し入れか分らないが、果物のようなものをひとかじり食べさせてもらったが、そのうまさは忘れられない。

この「摩天嶺」は、はげ山で標高約五百メートルだった。

後日、引揚船が佐世保に入ったとき、あのお婆さんは日本内地の山を見ながら、「ありがとう、ありがとう」と手を合わせていたが、その後船中

で亡くなってしまった。

八月某日

難所「摩天嶺」を越えてしばらく行くと、今度は本物の国府軍に出会った。見ただけで正規軍と分かる米軍式のしゃれた軍服姿であった。これから先の安全についても約束され、現地人の情けも厚く、食べ物にもありつけて元気を取り戻した。

七 奉天到着、収容所生活

やっと奉天に着いた。もうこのとき既に、市の名は瀋陽となっていた。全行程およそ二〇〇キロメートルの脱出行であった。大広場のロータリー中央には「日僑俘虜難民弁事処」があつて、その指示で、難民収容所とされている各街の貿易商館や会社のビルなどに収容されたが、ここで苦勞を共にしてきた人たちは、六十数人と、四十数人とのグループに分けられてしまった。せつかくここまで一緒に来た人々との別れは、辛く寂しいものであつた。

引揚げ許可があるまで、どれくらいかかるの

か、だれも知らない悶々の日が続いた。食べるためには働かなければならず、日雇いの労働に励んだ。辛い目には随分遭つたが、真夏の炎天下での倉庫屋根のコールタール塗りは、よく頑張つたものと今も思い出す。焼けついたトタン板の屋根と、コールタールの強烈な臭い、それにかんかん照りの暑さ、いくら金になるとはいえ、それは大変な労働であつた。

当時、奉天ではコレラがはやっていてせつかく苦勞してたどり着いたのに、ここで命を落とす人が多かつた。

約二カ月後、無蓋貨車に乗せられて出発し、錦西に向かつた。引揚船への乗船の待機場所である。ここで一週間滞在したが、極端に窮屈な生活だった。だが、もうすぐ日本に帰れるという希望から、少々の苦痛には我慢していた。

八 祖国に帰つて

錦西から、引揚港の葫蘆島コロトウに移動した。待ちに待つた引揚船が、葫蘆島の岸壁に着いた。船首

が、大きな口をあけた船で、米軍の上陸用舟艇「L・S・T」であった。船内では、まだ岸壁を離れていないのに、もう日本に帰り着いたような雰囲気となって、明るい声が響き渡っていた。

いよいよ出帆となり、甲板上に出て別れ行く大陸を眺めているうちに泣けてきたことを思い出す。小学二年生で兵庫から営口に渡り、楽しく過ごした懐かしい日々、旅順での思い出、安東からの脱出行など、走馬燈の如くに思い出が頭の中を駆け回った。引揚船はエンジン音も軽く、日本へ、日本へと向かっているのに、私は少しも嬉しい気持ちになれなかった。

この大陸で、多感な少年期を過ごした十年、いよいよ別れだ。さらば心の故郷、我が満州。

あとがき

父は、昭和二十年八月十七日、終戦になったことも知らずに、東満州の地で戦死をしました。シベリア抑留の後に帰って来られた戦友の方から、公報と共に知らせていただきました。

私も現在七十一歳になりましたが、今日あるのも、あの苦難の脱出行において、私たち家族に対して献身的に世話をしてくださった営口紡績の少壮幹部社員の宮田さん、土屋さん、村野さん、上田さんたちのおかげで、この方たちの御尽力がなければ、無事であつたかどうか分かりません。

また、私自身のことでも、営口市を追い出されて約一年の間、多感な十七歳の少年ながら体力面でも頼りにされ、一人前の大人として扱って頂き、多くの得難い体験、勉強をしたことは、普通の社会では考えられない貴重なものであります。特に、人間の善なること、家族愛、人情の機微、切羽詰まったときの人間の行動など、自らの体験から得た教訓は、私のその後の人生生活の中において十分に生かされたものと確信しています。